

二〇一六年度入学試験問題 (第二回)

国語 (五十分)

【注意】

- 一 この試験の問題文・設問は、1ページから13ページに印刷されています。
- 二 解答は、すべて別の「解答用紙」に記入しなさい。
- 三 文字は、正しくきちんと書きなさい。
- 四 、。 「」はそれぞれ一字と考えなさい。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「お母さん、ちょっと休むから、マユ、はなちゃんのそばにいてあげてね」

ママは言った。

私は、バーバにそっと近づく。そして、バーバの周りに漂う空気を、思いつきり肺に流し込んだ。

果実が腐る寸前のような、熟した甘い匂い。バーバに近づくとき、林檎と梨と桃を混ぜたような匂いがする。そして、この匂いを嗅ぐたびに、私は生まれて初めてチーズを食べた時のことを思い出してしまう。

あれは、パパの誕生日だったのか。それともパパとママの結婚記念日だったのか。その日両親はワインを飲んでいった。そして、テーブルには何種類かのチーズが並んでいた。

マユも食べてみるか。パパに差し出された一切れを口に含んだ私は、うえっとすぐに吐き出した。パパ、まずいよ、これ。マユはまだ子供なんだなあ、パパは顔をしかめる私をうれしそうに眺めていた。だって、腐ってるじゃない。私は抗議するように言った。腐っているんじゃない

よ、醸しているんだよ。パパは、私が吐き出したのと同じチーズを幸せそうに口に放り、それから足の長いグラスを掲げて真っ赤なワインを飲み干した。そして言ったのだ。腐敗することと発酵することは、似ているけど違うんだよ。どう違うのかは、パパも上手に説明できないけど。

その時、ママがどういう顔をしていたのか、思い出せない。私は、ちぐはぐな両親の蝶番となるべく、幼い子役を演じるのに必死だった。だから、もし今パパがそばにいるのなら、真っ先に尋ねたい。バーバは腐敗しているのか、それとも発酵しているのか。

私は、お人形遊びをするように、バーバの白い髪の毛をもてあそぶ。バーバの髪の毛をいじることを、ママはあまり良しとしない。でも私は、そうされている時のバーバはとても気持ちよさそうだと感じている。今日は、髪の毛を左右二つに分けて、三つ編みに結んでみる。本当に柔らかくてお人形みたいだ。私が持っているカラーゴムで、左右の端を結んであげた。そして、私は耳元で囁く。

「バーバ、おなかすかない？ 私のキャラメル、食べる？」
ママの言い方が移って、幼い子供に話しかけるような口調になった。私は、箱からキャラメルを一つ取り出し、紙

を剥いてバーバの口元に持って行こうとする。と、その時、バーバの口元がふわりと緩んで、かすかに「ふ」という音がした。

「ふ？ ふって何？ このキャラメルは、熱くないから、ふーふーはしなくていいんだよ」

バーバが何かに反応したことに慌ててしまい、早口になった。けれど、いざ私がキャラメルをバーバの口に入れようとすると、バーバはまたきゅっとくちびるを閉ざしてしまふ。

「はい、あーん」

ママと同じ、甘ったるい声になった。すると今度は、バーバの右手がすーっと伸びて、窓の向こうを指差す。普段は直射日光が眩しいので、薄いほうのカーテンは閉めたままだ。

「お外、見たいの？」

しつかりとバーバの目を見て尋ねると、バーバはまた、「ふ」という音を漏らした。

じゃあ、ちょっとだけだよ、そういつて、私はバーバの寝ているベッドを離れ、窓辺に移動する。それから、カーテンを開けた。その時、

「バーバ、もしかして、ふって富士山の、ふ？」

ふとひらめいたのだ。その瞬間、バーバの薄曇りのような色の奥まった瞳が、ピカッと輝いたように見えた。

あまりにも当たり前前に存在するので見慣れてしまい、忘れそうになっているけど、私達が暮らしている町からは、富士山がよく見える。昨日まで大雨が降っていたから、空気がいつもより澄んでいるのかもしれない。富士山は、ホームの窓から見える景色の中で、しつかりとした輪郭を現わしている。

「これでいい？ バーバ、富士山が見たかったんだね」

カーテンを開けたせいで、ますます心地よい風が流れ込んでくる。ママは、すっかり眠っているらしい。けれど、まだバーバは、「ふ、ふ」とかすかな息を出す。マユならわかってくれるでしょ、と訴えかけるような表情で。

「見えない？ ほら、よく目をこらすと、向こうに、富士山、見えるでしょ」

バーバは口元をほころばせ、くちびるをパクパクと動かしている。

「ん？ おなか空いた？ やっぱりキャラメル食べてみる？」

そう言いかけた時、何かを思い出しそうになった。バーバのこの表情を、いつかどこかで見たことがある気がしたのだ。いつだっけ？　バーバの、はにかむような柔らかな表情。

あつ、そうだ。何年か前に家族みんなで、かき氷を食べに行った時だ。並んで並んで、やっと噂のかき氷にありつけた時、バーバは、言ったのだ。ほーら、マユちゃん、富士山みたいでしょう、って。あ、そうか、そういうことか！！

「バーバ、わかった、少し待ってて。マユ、かき氷買ってきてあげるから！」

気がつくと、大声で叫んでいた。私が騒々しく部屋を出て行くこうとした時、ママが目を覚ました。

「マユ、どこ行くの？」

眠そうな気だるい声で尋ねるので、

「バーバ、富士山が食べたいんだよ、絶対にそうだよ、だから今」

そう言いかけると、

「富士山？」

ママは、不思議そうに本物の富士山の方を見つめる。

「だから、何年か前、みんなでかき氷を食べに行ったじゃない。あれだよ、あそこのなら、バーバ、食べられるんだって」

「だって、あの店は」

「わかってる！　でも、行くしかないでしょっ！」

じれったくなり、つい乱暴な声を出してしまう。けれど、そうしている間にも、バーバの体に変化していくように怖かったのだ。私は、ホームに置いてあるクーラーボックスを肩に担ぎ、猛然と部屋を飛び出した。廊下を走りながら、バーバが受け付けなかったキャラメルを、口の中に放り込む。

駐輪場に停めてあった自転車にまたがり、かき氷店を目指した。大雑把に言うくと、そこは、かつて家族三人で暮らしていた町の方角にある。道なら覚えている。ただ、バーバの車で通った時の記憶だから、交通量の多い幹線道路を走らなくてはいけないけど。

夏休みで連休のせいとか、車がかなり渋滞している。私は、X に歩道と車道を交互に走った。ぐんぐんと富士山が迫ってくる。急がなきゃ、急がなきゃ、気がつくのと、猛スピードで走っていた。体が、風の一部になってし

まいそうだった。

何かアクシデントが起きても不思議じゃなかったけど、何も起きずにかき氷の店まで辿り着く。でも、やっぱりここも、ものすごい人だからだ。店の前に、長い行列ができている。どうしたら良いのだろうか。このまま待っていたら、夜になってしまいかもしれない。私は、一心に店の奥へと突き進んだ。

この店では、天然氷というのを使っている。冬、プールのような所に水を貯めて自然の力で凍らせ、それを切り出して保管し、かき氷にするのだ。私は今でも普通の氷との違いがよくわからないけれど、パパはその氷の味をえらく褒めていた。この氷でウイスキーの水割り作ったら、うまいだろうなあ、とか何とか言ってる。でも、今はそんな感傷に浸っている場合ではない。一秒でも早くバーバにかき氷を届けなければ……。

店の庭では、みんなうれしそうにかき氷を頬張っている。あの時も向日葵が満開だった。確かに数年前、私達はこのままいつまでも同じメンバーでいることに、何の疑いももたず、ここでかき氷を口に含んだのだ。

「すみません」

勇気を振り絞り、窓の所で四角い氷を機械で削っているおじさんに声をかけた。でも、周りが騒がしくて聞こえなかったのか、無視されてしまう。

「すみません！」

二度目は、声を強くした。ようやくおじさんが、できたの氷の山に透명한シロップをかけながら私の方を見てくれる。けれど、その先の言葉が繋がらない。私はみるみる泣きたくなった。ただ、バーバにかき氷を食べさせたいだけなのに。どうしてこんなに悲しくなってしまうのだろう。けれど、早く言え、と何かが私の背中を強い力で前に押ししてくれたのだ。

「バーバが、いえ祖母が、もうすぐ死にそうなんです。それで最後に、ここのかき氷を食べたいって」

ぐつとくちびるを噛みしめ、涙の落下を食い止める。

一瞬、音という音が世界から消えた。どうしてそんなことを口走ったのか、自分でもよくわからなかった。ママとの会話でも、ずつと気をつけて避けて通ってきた、一文字の単語。それが口をつけて出たことに、自分でも驚いてしまった。

「ちょっと待ってて」

子供の言葉など相手にしてくれないかと懸念していたのに、おじさんはぶつきらぼうにそう言うのと、またくるくと機械のレバーを回し始めた。目の前のカップに、白い氷の山ができていく。私は、ポケットから小銭を取り出した。かき氷一杯は買える。おじさんは、氷の小山の上から、透明なシロップを Y かけた。それを、クーラーボックスの中に入れてくれる。

「ありがとうございます！」

お金を払い、深々と頭を下げて、その場を立ち去った。帰り道は、ますますスピードを上げて自転車を走らせる。クーラーボックスの中の小さな富士山が溶け出す前に、どうしてもバーバに届けなくてはならない。

「ただいま。バーバ、富士山、持ってきたよ」

ホームに戻ると、またカーテンが閉じていて、部屋全体が飴色に見える。クーラーボックスから、急いでかき氷を取り出した。もし全部溶けてしまっていたらと想像すると胸が潰れそうだったけれど、かき氷は、少し縮んだように見えるだけで、きちんと富士山の形を留めている。私は、ママにかき氷を手渡した。

「はーなちゃん、あーん」

ママはそう言いながら、バーバの口元に木製のスプーンを差し出す。バーバのくちびるは、うっすらと開いている。けれど、スプーンが滑り込めるほどの隙間はない。

「マユが、一人で買いに行ってくれたんですよ」

C ママの瞳から、つるんと一粒の涙が落ちる。やがてバーバは、何かを言いかけるように上下のくちびるを広げると、スプーンを受け入れた。

「おいしいでしょう？」

ママの声が湿っている。二度、三度と、バーバはスプーンの上のかき氷を吸い込んだ。そのたびに、目を閉じてうっとりとした表情を浮かべる。

私は確信する。バーバは今、数年前の夏の日、家族で行ったかき氷店のあの庭に帰っている。ごくり、と喉が鳴って、富士山の一部が、バーバの体の奥に染み込んでいく。私は窓辺に移動して、カーテンをかきわけ外を見た。富士山が、オレンジ色に光っている。すると、マユ、とママが呼ぶ。

振り向くと、ほら、バーバがマユにも食べさせたいって、と、私を手招いている。驚いたことに、バーバは自分で木のスプーンを持っている。

近づくと、私の口にかき氷を含ませてくれた。同じように、ママの口にもかき氷を含ませてくれる。ママは明らかに、私よりも年下の少女の顔に戻っていた。

「おいしいねえ」

舌の上のかき氷は、まるで冷たい綿のようだ。さーっと溶けて、消えてなくなる。体のすみずみにまで、爽やかな風が吹き抜ける。

「眠くなつてきちゃった」

そのままバーバのそばにいたら、泣いてしまおうだったのだ。簡易ソファへ移動した。ママの前で泣くなんて、かつこ悪い。

「軽い熱中症かもしれないから、そこで少し休みなさい」

ママが威厳たつぷりに命令する。バーバとママ、二人の世界を邪魔しないよう、横になってそつとまぶたを閉じる。

再び目を開けた時、部屋の中があまりに静かで、胸が

Z

真つ二つに折れそうになった。天井が、虹色

に輝いている。もしかして……。私は起き上がって一歩ずつベッドに近づいた。バーバの隣に、目をつぶったママがいる。私は、バーバの鼻先に手のひらを翳した。よかつ

た。バーバは、生きている。

くちびるの端が光っていたので、私はそこに自分の右手の人差し指を当てた。そのまま口に含むと、甘い味がする。でも、さっきのかき氷のシロップの甘さじゃない。もつともつと、複雑に絡み合うような味だ。やっぱり、

バーバは今この瞬間も、甘く発酵し続けているのだ。

(小川糸「バーバのかき氷」による)

【注】

- *1 腐敗——人にとって有害なものに変化すること。
- *2 発酵——人にとって価値のあるものに変化すること。
- *3 蝶番——物事をつなぎとめるもの。

問一 — 線部A「バーバの薄曇りのような色の奥まった瞳が、ピカッと輝いたように見えた」とありますが、「ピカッと輝いたように見えた」のはマユがどういう心情をもっていたからか。マユの心情の説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分にならバーバの気持ちを読み取ることができ、という自信をもっていた。
- イ 自分には富士山の存在が当たり前すぎて気付けない、といういらだちをもっていた。
- ウ 病気で弱ったバーバの目に輝きを取り戻すためなら何でもしたい、という覚悟をもっていた。
- エ 何も反応しなくなったバーバと最後にもう一度意思疎通そつうをしたい、という願望をもっていた。

問二

X

にあてはまる四字熟語を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 意気軒昂けんじやう
- イ 支離滅裂しりめつれつ
- ウ 天真爛漫てんしんらんまん
- エ 臨機応変

問三 — 線部B「ずっと気をつけて避けて通ってきた、一文字の単語」とはどういう単語か、答えなさい。また、なぜその単語を避けて通ってきたのか、理由を説明しなさい。

問四

Y

Z

にあてはまる言葉を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア うやうやしく
- イ にがにがしく
- ウ ふてぶてしく
- エ どきゆんと
- オ ぼっかりと
- カ ほわんと

問五 ——線部C「ママの瞳から、つるんと一粒の涙が落ちる」とありますが、なぜママはここで涙を落としたのか。このとき
のママの気持ちを具体的に説明したものとしてみれば、**間違**いと思われるものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 常に近くで看病していたのに、バーバの要求に気づいてあげられなかった自分に対して、悔しく思ったから。

イ バーバを喜ばせるために懸命になってくれた娘の優しい気持ちだが、成長と共に感じられてうれしく思ったから。

ウ 以前家族でかき氷を食べに行ったことを思い出して、バーバが元気だった頃の家族の形態を懐かしく思ったから。

エ バーバの口が少ししか開かないのを目の当たりにして、バーバの死を受け入れざるを得ない状況で悲しく思ったから。

問六 ——線部D「ママは明らかに、私よりも年下の少女の顔に戻っていた」とありますが、なぜ「少女の顔に戻っていた」のか
説明しなさい。

問七 ——線部E「バーバは今この瞬間も、甘く発酵し続けているのだ」とありますが、確実に死に向かいつつあるバーバに対
して「発酵し続けている」と言っているのはなぜか、一〇〇字以内で説明しなさい。（【注】の*1・2をふまえて説明する
こと）

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

やたら傲慢^{ごうまん}な人、人の言葉に傷ついたとき烈火^{れつゝか}のごとく怒^{おこ}り出す人は、本人は自覚していませんが、劣等^{れつちゆう}コンプレックスを抱^{かか}えているものです。

劣等感^{れつちゆうかん}というのは、だれもがもつものです。自分は学校で成績が悪かったし、頭の切れ味がちよつと鈍^{にぶ}いようだ。自分はかなり太り気味で、もう少し瘦^やせないとかっこ悪い。自分は運動神経が鈍^{おそ}くて、足は遅^{おそ}いし、球技は苦手で、体育の時間が苦痛で仕方がなかった。何が劣^{おと}るか人はそれぞれですが、だれもが何らかの劣等性^{れつちゆうせい}をもつものであり、そのことを自覚しているものです。

劣等感^{れつちゆうかん}はだれもがもつものだし、もつことは問題ないのですが、自分の劣等性^{れつちゆうせい}から目を背^{そむ}けようとするとき、そこに劣等コンプレックスが形成^{けいせい}されます。

個人心理学^{こじんこころがく}の提唱者^{ていしょう}アドラーは、劣等コンプレックスに苛^こまれている人に対して、「あなたは劣等感を感じていませんか」と尋^{たず}ねると、けつして自分が感じていることを認めることはなく、むしろ自分が周囲の人たちよりいかに優^{すぐ}れているかを答えるはずだと言います。【 1 】、その人

を観察すれば、劣等コンプレックスを抱えていることがすぐにわかると言うのです。

【 2 】、傲慢^{ごうまん}な人は、自分が有能^{ゆうのう}さを發揮^{はつぱい}できないことによる劣等コンプレックスをもっているため、人から見下されるかもしれない、だから自分を大きく見せなければならぬということ、偉^{えい}そうな態度を取ることになりません。

自分の劣等性を素直に認めていれば、傲慢^{ごうまん}な態度^Aでそれを隠^{かく}そうとするよりも、少しでも有能^{ゆうのう}になるために自分磨^{みが}きをするという建設^B的な行動を取ることができます。どうも仕事で有能^{ゆうのう}さを發揮^{はつぱい}するのは難しいなと感じれば、人の良さを売り物にして、周囲の人たちとの人間関係を良くするという方向で自分の価値を高めていくといった建設^B的な考えをもつこともできるでしょう。

劣等コンプレックスを抱えていると、何かにつけてイラツときたり、カッとしたりしやすくなります。

たとえば、頭の切れ味の鈍^{おそ}さが劣等コンプレックスになっていると、

「お前、そんなこともわからなかったのかよ」
と、友達がなんの悪意もなく言った言葉にコンプレック

スを刺激され、バカにされたと感じて、烈火のごとく怒り出したり、いじけた態度になって相手に嫌味を言ったりしてしまいます。

太っていることが劣等コンプレックスになっていると、服装や体型の話になると嫌な気持ちになるため、その手の話題は避けるようになります。「3」友だちがスレンダーな人をカッコイイと賞賛すると、まるで自分がバカにされたかのように攻撃的になり、そのスレンダーな人をこき下ろすような嫌味を言ったりします。

運動神経の鈍さが劣等コンプレックスになっていると、スポーツの話題はできるだけ避けようとしたり、スポーツやスポーツ選手をバカにするような発言をしたりします。たまたまテニスをすることになり、全然うまくできないのを友だちにからかわれると、顔を真っ赤にして怒り出し、その場を去ったりしてしまいます。

C
そこで大切なのは、自分の劣等コンプレックスを知っておくことです。劣等コンプレックスは、無意識のうちに含まれるものであるため、自分では気づいていないものです。ゆえに、これまでの自分を振り返って、どんな言葉や態度にカッとしやすいかをチェックすることで見当をつけ

ることができません。カッとする自分を意識できれば、自分を客観視でき、怒り感情が鎮まります。自分の劣等コンプレックスが刺激されそうな場面になったら、カッとしやすい自分を意識するようにしましょう。

もうひとつ大切なのは、自分の短所を認め、笑い飛ばせるようにしておくことです。頭の切れ味の鈍さも、太っていることも、運動神経が鈍いことも、それを受け入れ、だからといって自分が人間として劣っているわけではない、人間として価値が低いわけではないと開き直ることができれば、劣等コンプレックスのような厄介なものをもたずにすみます。

「オレ、とろくて、しょっちゅう早とちりするんだ」

「オレ、デブだから、飛行機に乗ると椅子に挟まって立てないことがあって、自分でも笑っちゃうよ」

「私、運動神経ゼロだから、大きなラケットでも派手に空振りばかり。当てない方が難しいよって言われるくらいなんだから、イヤになっちゃう」

こんなふうに関自分で自分を笑い飛ばせば、人にかかわれても、たとえきついことを言われても、腹を立てたりせずに一緒に笑うことができます。

(榎本博明『「イラッとくる」の構造』による)

【注】

* 烈火のごとく——燃えさかる火のように。

* アドラー——オーストリアの心理学者。

* 苛まれている——休む間もなく苦痛を与えられる。

* スレンダー——すらっとした細身の体型。

問一 〔 1 〕〔 3 〕にあてはまることばを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア さて イ たとえば ウ でも エ また

問二 ——線部A「それ」とは何を指しているのか、具体的に表している部分を文中から抜き出しなさい。

問三 ——線部B「建設的な行動」とはどのような意味か、次の中から最も適切なものを一つ選んで記号で答えなさい。

ア 物事を良くしていかうとする積極的な行動。

イ 物事を基礎から考えて少しずつ積み上げてゆく行動。

ウ 物事を多くの人と分担・協力して作り上げてゆく行動。

エ 物事をいろんな方向から考えてゆるぎないものにする行動。

問四 — 線部C「そこで大切なのは、自分の劣等コンプレックスを知っておくことです」とありますが、なぜ「自分の劣等コンプレックスを知っておくこと」が必要なのか、説明しなさい。

問五 — 線部D「劣等コンプレックスのような厄介なもの」とありますが、なぜ厄介なのか、説明しなさい。

問六 「劣等コンプレックス」と「劣等感」を、筆者はどのように使い分けていますか。その違いを説明しなさい。

三

次の――線部についてカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 部屋の中をセイケツに保つ。
- ② アットウ的な得票数で選ばれた。
- ③ ツトめて明るくふるまう。
- ④ 予想外のテンカイとなった。
- ⑤ 遠足のコウホ地を探す。